書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

近代日本哲学史

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序　10

明治以後の移植哲学の概観（ミルからハイデッガーまで）　12

一　展　望　12
二　政治的・経済的諸条件　16
三　哲学ジャーナリズム　22
四　哲学的観念論　23
五　唯物論　27
六　結　語　30

哲学移植史（その一）　34

一　反動と進取　34
二　接種と発展　53

哲学移植史（その二）　67

一　ドイツ哲学最初の移植　67
二　カント研究の発達　75
三　ヘーゲル研究の発達　92

明治時代の日本哲学（その一）　105

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一　「哲学」以外の哲学者　105
二　優れたる知識哲学　115

明治時代の日本哲学（その二）　128
一　観念論的哲学　128
二　唯物論及び唯物論的哲学　135
三　仏教家の哲学論　150

論理学の発達（明治思想は如何に論理学に反映したか）　158
一　158　二　162　三　166　四　174　五　180　六　194

日本におけるハイデッガー解釈　199
一　199　二　202　三　209　四　217

「西田哲学」の根本問題　224
一　224　二　229　三　240　四　245　五　248　六　257

附録　わが国では何故弁証法が発達しなかったか？　259
一　259　二　260　三　266　四　271　五　276

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、本書の底本には一九三五年八月刊（ナウカ社）の戸弘柯三著『近代日本哲学史』を使用した。戸弘柯三は三枝博音の変名である。

一、漢字は本書全体において新漢字表記とし、仮名遣いは地の文において新仮名遣い表記とした。

一、下段の見出しは本書刊行所が附加したものである。

一、送り仮名を多少加減し、読み仮名ルビを多少補った。「にさん」と読む「二三」には読点を補って「二、三」とした。

一、註は段落末に配置した。

一、［　］で示した部分は底本では伏字になっている。著作集版に拠ってできるだけ伏字を置き換えた。

一、本書刊行所の註記は（　）括りの二行割で行内に挿入した。

一、引用文中にある〔　〕括りの挿入は著者によるものである。

一、「我々」と「吾々」などの不統一や片仮名人名表記の多少のゆれはそのまま表記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向にある以下の語を、仮名表記に置き換えた。（五十音順で送り仮名は代表例）。

宛も（あたかも）、況や（いわんや）、印度（インド）、於て（おいて）、於ける（おける）、和蘭（オランダ）、希臘（ギリシャ）、悉く（ことごとく）、是（これ）、然し（しかし）、併し（しかし）、而も（しかも）、然る（しかる）、屢々（しばしば）、其（その）、就中（なかんずく）、殆ど（ほとんど）、略々（ほぼ）、亦（また）、若く（もしく）、尤も（もっとも）、稍々（やや）、漸く（ようやく）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

近代日本哲学史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序

わが国では昔から古哲、先哲、後哲、哲人等の言葉が用いられて、学問の「超俗的」な部分を「哲」という概念でもって言い表わしてきた。僧侶や儒学者や医学者の或るものが、その「哲」にあずかったのであった。国民の大多数のあずからざるものであった。ようやく明治に入って、広く世界の知識が取り入れられるようになって以後、哲学が漸次に読書し得る人々の間の関心事になるようになった。しかし、今日では哲学はもはや読書する知識階級の専有物ではなくなりつつある。さて、今日にあってわが国の哲学を振り返ってみるとき、何よりも顕著な事実は哲人しかいなかったところへ哲学が移植されたことである。

私はこの哲学の移植を中心にして、わが国の明治以後の哲学の発達を辿ってみた。この期間を「近代」と呼んだのは少し無理かも知れないが、この時期は

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

わが国の哲学にとって全く画期的なものであるから、敢えてこの言葉を使用したのである。

著者が遺憾に思うのは、英仏哲学の発達と大正以後の一般の哲学のそれとを叙述することの甚だ不十分であったことである。この欠点は機会を得て補いたいと思う。この小著は、すでに発表した諸論文をもととして、これを補うに新たに数個の論文を書き加えて、成ったものであるから、叙述内容が前後重複しているところがある。尚、或る節においては哲学者を呼ぶに尊称を用いた箇所もある。読者の諒恕を乞う次第である。日本にはただ一つの哲学史もない現状が、著者に不完全なこの著述を世に送る決心をなさしめたものである。しかし、これから完備せる日本哲学史の生れるまで、一つの存在理由はもつであろうと思う。

最後に、本書の成るに当ってよせられた鳥井博郎氏の助力と、ナウカ社大竹博吉氏の厚意に対して感謝の意を表したい。

昭和十年盛夏

戸弘　柯三（三枝博音の変名）

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

明治以後の移植哲学の概観（ミルからハイデッガーまで）

一　展望

明治四年中村敬宇によって英国のジョン・スチュアート・ミルの『自由の原理』が翻訳されて、とにかくにヨーロッパの哲学思想の移植の発端が開かれてから、今日わが国の大学の講壇及び哲学ジャーナリズムにおいて、ドイツのハイデッガーの哲学が喧伝される迄の時期は、約六十年である。これを或る一国の或る一時期の哲学の発展として見るとき、それは必ずしも短いとはいえない。西洋の哲学史において、いわゆるギリシャ哲学とならび称せられるドイツのドイツ・イデアリスムスの哲学体系の成立した時期でも、史家によると四十年をもってこれを劃しているほどである。日本の哲学の六十年は短くない。のみならず、極めて複雑した発展相を示している。いわゆるドイツ観念論なるも

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

中村敬宇訳『自由の原理』（ミル）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

のは、しばしば「カントからヘーゲルまで」の哲学として呼ばれて来ている。ところがこの二人の哲学者の間の連続はほぼ同質であって、一つの体系的統一を構成している。日本の場合では、こういった統一性は全く見られない。カントからヘーゲルに至るドイツ観念論は、ドイツのブルジョアジーが封建制との戦いにおいて確定的勝利をかち獲るように成りつつあった時期の哲学であった。だから、ドイツのブルジョアジーの発展のための国民の啓蒙及び市民的文化の激成の役目を果したのである。それと同時に、このドイツ観念論の哲学の中には、ドイツのブルジョア・イデオロギーの純粋なる反映像が結ばれているのである。

日本の六十年間の哲学の発達もまた同様に、日本の資本主義確立の全盛期における哲学の成長である。しかるに、日本の場合では資本主義体制が哲学というひとつの意識形態の中に結成している映像を見ると、それは決してドイツの場合のような統一的・完結的なものではない。その意味で、日本の資本主義は未発展のところがあると、言えなくはない。さて、名著の評ある『カントからヘーゲルまで』の著者リヒハルト・クローナーはドイツ観念論の発展過程を、「一つの……思惟運動」だと言ったが、日本の明治・大正・昭和における哲学の

資本主義確立の全盛期における哲学の成長

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

歴史的発達を一つの思惟運動だと形容することは何としてもできない。唯心論者はそう言いたいであろうが、唯心論的な歴史学の立場からでもなかなかそうは言えない。

それは勿論、ミルは政治論及び経済論的関心から迎えられたのである。今日喧伝されているハイデッガーも哲学の政治的性格を示している哲学者と考えられはじめている。というのは、ハイデッガーは、ドイツの「非常時」的興奮に捲きあげられて、哲学でも国防勤務につけると宣言しているから。さて、そうするとミル及びハイデッガーの学問は、それぞれ政治的性格をもっているもののようにとれる。ところが、これは頭尾の単なる一致であって、決してそれから、ハイデッガーまでの首尾一貫を意味しない。むしろ、それはミルのもて囃された時代とハイデッガーが流行している今の時代が似ていることを、語るものである。日本におけるこの二つの哲学の間には、ショーペンハウエルの「厭世哲学」も介在すれば、ドイツの資本主義確立前の激成的時期に鬱憤を撒き散らしたあの「天才的」なニイチェも飛び込んでくる。政治や技術の哲学的問題はこれを全く忘却し去って、純粋に「理論（テオリー）」を説くフッサール的な現象学的哲学も浸透して来ている。日本は、カント哲学そのものの普及も、新カント派の

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

「カントに還れ」という運動も、現象学派の「カント以前に還れ」という主張も、ほとんど同時代に入って来て、混線し合っていた。まだヘーゲル哲学そのものの理解も普及もないところへ、「ヘーゲル復興」がけたたましく叫ばれた。日本の哲学の歴史を貫いているものは、先ず忙しく相継いで押し寄せる種々なる哲学の移入の混雑である。

尚又ミル（スペンサーも同様）の哲学に具わっている政治的性格とハイデッガーの哲学の政治的性格とは、仔細に検すれば、その間には非常なる区別がある。ミルはブルジョア［革命］期の古典経済学をブルジョア盛期のマルクスのいわゆる「その上に牧歌がただよっている経済学」へと引き継いだ英国の経済哲学者である。ところが、今日のハイデッガー的哲学はドイツの資本主義没落期のそして一面は悪夢的興奮状態にあるナチスの政治的性格を具えている。一つは変革から飽和への過渡期の、他はいわゆる反動期の哲学である。

かようにしてミルからハイデッガーまでの日本の哲学は、哲学そのものとしてはこれを統一する何ものももたぬように思われる。そこで問題になるのは、かかる日本の移植哲学の発展を産み出した日本の政治的・経済的事情である。

種々の哲学移入の混雑

統一感なき移植諸哲学

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

二　政治的・経済的諸条件

明治年間における西洋哲学の移入及び発展は、自由民権の政治的運動と離して考えることができない。この運動は明治初年に始まり、七年（一八七四年）の民選議院設立の建白、十三年の酒屋会議、十四年の国会開設の大詔、二十三年（一八九〇年）国会開設、三十三年の政友会の立党の頃までの約三十年に亙るものと一応見てよい。この三十年間の内の中期、明治十年代より二十年代のはじめにかけて、ミル及びスペンサーの政治及び経済論が知識階級に迎えられ、他方西洋哲学の移入及び一般的普及の促進となった。この三十年の時期のはじめの頃、日本の市民的社会の進出にとっての思想的開拓者としては、誰よりも福沢諭吉が挙げられねばならない。福沢は日本の最初の英語の普及者である。福沢の学問の基礎はベンサムの功利論、スミスの経済学説等である。彼は「学問のすすめ」に努力し、市民的社会の教育に対して貢献した。後に政治及び学問において一つの流れと勢力とをもった大隈重信は、広く政治的に言っても移入学の系統から言っても福沢の啓蒙運動に結びつく。その包懐する政治思想からも勿論であるが、移入学の系統から言って大隈（改進党）に対立するもの

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

は、板垣退助（自由党）である。以上で輸入学の系統が二つあったことになる。明治の移入学の系統には更にもう一つある。それはドイツ学である。この系統の移入学は、ドイツ憲法を範とした日本の憲法制定についての中心人物伊藤博文の政治的運動によって一層促進されている。

明治時代に移植せられた学問及び思想は、主として英語、フランス語、ドイツ語を通じて、移入されている。英語による学問及び文芸は、日本人のヨーロッパ文化による啓蒙に対して終始大きい影響力をもった。産業及び商業においてはもとよりであるが哲学においてもそうであった。ミル、スペンサー、グリーン、ミューアヘッド等の社会学、倫理学、ラッセルの新実在論等々。フランスの学問及び思想は、英国のそれについで移入された。ここでは技術に関する学問が勢力をもっている。陸海軍の技術的移植学はフランスの学問である。しかし、フランスの哲学は日本の移植哲学のなかで力をもっていない。それは十九世紀のフランス哲学の萎靡にもとづくのである。しかし他方フランスが革命を成し遂げ共和国であったことが国風民情を異にするという理由で、先ず政治的方面でフランス思想の移入を容れられなかったことにも因るものと思われる。伊藤の憲法取り調べの為のドイツ派遣の以前から、日本憲法の範は英国か

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

フランスかもしくはドイツにとるという三つの意見があった。その他露、墺（オーストリア）からとる意見もなくはなかった。しかし民間の学者が集って作ったいわゆる数種の「私擬憲法」でも、元老院で出来上った草案でも大体英国的であったようである。少くとも英語を通じての調査研究であった。しかし、「国体人情が吾国に相似て」いるという考えから、ドイツ殊にプロシアの憲法に着目することになった。伊藤をしてプロシアを撰ばしめたのは、岩倉であろうと、『日本憲政成立史』の著者（鈴木安蔵）は言っている。いずれにしても、この問題は、ドイツの東洋貿易に対する野心、尚又明治以来の英仏二国の日本における勢力の角逐等の列強の帝国主義的競争と、日本の国情の当時の政治家の洞察との両方から、解かれねばならないであろう。しかし、ドイツからは法律上の顧問として多くの学者が来ている。更に法・文科の教師も招聘されるに至った事実は、確かである。東京大学の総理であった加藤弘之はドイツ学に造詣をもっていたし、憲法の研究についてもドイツの国権論を公に講述していたほどである。十九年に日本に招かれて来た哲学の外国教師ブッセもドイツの政治的思想の移入に直接に連関するのである。かようにして、政治的思想に裏づけられて、フランスの哲学が日本に移植される地盤は欠けていたのである。

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

ドイツからの法律顧問

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

自由民権思想に関連して、なかんずく中江兆民によってフランス語による哲学が、僅かに日本に移植されたことにとどまっていた。

板垣退助の自由思想は必ずしもフランス思想に由来してはいない。板垣は英国のスペンサーの進化論を読み影響されていたのであるという説をなす人々もあるけれども、大勢から言って板垣は、フランス直輸の自由思想にもとづいていることは否定できまい。しかし、全体からいって、日本に対するフランス的啓蒙は到底英国のそれほどでない。

ドイツ的啓蒙は、フランス的啓蒙の次に技術・文学・哲学に亙って、日本の移入文化を支配した。明治後半の政治・行政・医学・文芸・哲学においては到る処にその影響力が及んでいる。哲学においては特に顕著である。十八・九世紀のドイツの哲学の意義とその世界的名声とがこの哲学の日本への移入の最も大きい理由である。しかし、伊藤博文の憲法取調のドイツ行きはそのひとつの機会をなし、或る点類似している両国の国風と政情とが移植の当面の理由であった。とにかくこのドイツ哲学がその後の日本の哲学の主流を形成してしまったのである。このドイツ哲学は東京大学を根拠とした。しかし、それまでには曲折がないではない。東京大学は明治十年に設置された。十三年には東京

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

フランス哲学

ドイツ哲学が日本の哲学の主流を形成

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

学士会院（後の帝国学士院）が創設されたが、福沢諭吉、西周（あまね）、中村敬宇、加藤弘之等は最初の会員であった。これらの人々は、加藤を除いては、英語を通じた英国的啓蒙の系統に属する。アメリカから東京大学に来たフェノロサは、ドイツ哲学をも伝え、ヘーゲルをも講義した。フェノロサの在職中に招聘されて来た英国人クーペルもドイツ哲学殊にカントの紹介にひとつの貢献をもっている。ドイツ人でロッツェの学徒であったブッセ（十九年）や、E・ハルトマンの学徒であったケーベル（二十六年）が、日本に招聘せられるまでの哲学の外国教師の影響は、英国的啓蒙の部類に属している。しかし、伊藤博文一行のドイツ行きと連関をもつブッセ招聘以後は、日本の哲学は漸次ドイツ的啓蒙の部類に属している。井上哲次郎のドイツ留学からの帰朝は二十二・三年の頃である。東京大学の哲学会の創立は十七年、『哲学雑誌』の創刊は二十年である。

明治十八年から二十三年に亙る頃は、日本の資本主義の最初の急激な発展の時期である。鉄道、水運、紡績、鉱山等々の計画はことごとくこの時期に確立されている。産業上の資本金は十七年から二十三年までに十四倍の飛躍的発展をなしている時代である。政治的には国会開設実現の直前であり、条約改正の喧しい時代もこの時期である。とにかく日本の産業、政治及び文化方面の異常

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

東京大学

資本主義の最初の急激な発展期

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

な発達が、仕遂げられた時代である。

わが国の資本主義の発達は幾回かの外国との［戦争］を推進力としていることは、逸せられないが、日清戦争直後から日本の哲学界は漸次「日本的」になろうとした。『太陽』の創刊号（三十年十二月）で、すでに井上哲次郎は、「戦争後の学術」と題して、「日本から学者が多く出て、世界の学術に光りを与へる事が起らうといふのは、斯様な国運をして隆盛ならしむる様な事象が必要であります。恰も好し今回の戦争が起りましたので、此戦争の結果として種々なる影響が学問社会に及んで、さうして、此学術が著しく進歩をなす事は、之を思へば実に壮快の感にたへないのであります」と語っている。［日清戦争］がもたらした償金三億六千万円の流入は、資本の不足に阻まれていた日本の産業の第二次の発展を促進したことは今更いうまでもない。かくて「種々なる影響が学問社会に及んだ」ことも、また考え得られるのである。日露戦争の後に、『哲学雑誌』の雑報記者は「［戦争］の余沢」と題して「［戦争］の余慶」の哲学に及んでいることを述べている。それらも、日本の哲学の発達に対応する政治的・経済的条件として注意していいであろう。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

三　哲学ジャーナリズム

日本の資本主義そのものは、藩閥的勢力にその原動力をもってい、産業上の設備の多くが政府によって遂行されている。福沢諭吉のいわゆる「学校兵備は政府の学校兵備なり、鉄道電信も政府の鉄道電信なり」である。民衆はただ「政府の私見に帰していればよかつた」のであった。産業の方で言えば、明治十年代の前半に見られるいわゆる「模範官営工場」の制度がある。勿論これはわが国の産業の発達に大いに役立っている。学問の側でいうならば、明治十年前後の頃、論理学（＝思想の法）や物理学の如き技術に関する学問の普及が、盛んに文部省の手によってなされている。こういった国では、哲学もまた官僚的庇護のもとに発展せざるを得ない。ところがここに一つの小さい例外がある。哲学的観念論としてのドイツ哲学が、（しかも後には日本のアカデミー哲学の主流となった哲学が）、ジャーナリズムによって広く移植されたことである。十九年の中江兆民の『理学鉤玄』は訳述書ではあるが、ドイツの「批評哲学」の紹介に役立っている。十七年の竹越与三郎の『独逸哲学英華』は、当時アカデミー哲学の側から取り上げられていないようであるが、ドイツ哲学の一般的普及の

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

中江兆民『理学鉤玄』
竹越与三郎『独逸哲学英華』

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

哲学移植史（その一）

一　反動と進取

1

欧洲文化の日本への移植のなかで、哲学が最後に来たということは、動かし難いことであろうと思う。天文、歴数、砲術の如きが移入されたのは、尚又ヨーロッパ人の宗教が伝えられたのは、四世紀も昔に遡らねばならぬほど昔であるにもかかわらず、哲学の移入は何としても明治になってからである。尤も、哲学はヨーロッパでも「哲学」として東洋に移されるほどに独立性をもってきたのは、いわゆるドイツ観念論の哲学の終結以後、つまりヘーゲル哲学完成後と見ねばなるまい。それならば、今日よりまさに一世紀前であって、すでに江戸文化でいえば文化・文政の爛熟期を終え天保時代に移った頃である。ドイツで

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

もこの時期から約半世紀後即ち前期新カント学派の最初の運動の起る頃までは、むしろ哲学は凋落の時期である。前期新カント学派の発端のもとに普通に挙げられているアルバート・ランゲの著書『カントとその亜流』の出版されたのは、一八六五年である。一八六五年といえば、わが慶応元年である。そうだとすれば、たとえ西洋文物は移入されつつあったにしても、西洋の哲学の移入は江戸時代においては遂に見られなかったと見るのは誤っていまい。明治における西洋哲学はといえば、まず加藤弘之の名を逸することはできないが、明治洋学の先駆者加藤弘之も、もとは哲学の修学ということを考えていたのではなかったのである。彼は『自叙伝』[1]のなかで、次のように言っている。「余は前述の如く、祖先以来代々、甲州流兵学師範の家に生れたのであるから、時勢に応じて西洋兵学を研究せんがために、和蘭学を始めたのであれば、修身兵学に従事するのが当然のことであるけれども、しかし西洋兵学は世間之を好む人も多くなり、且つは余自身は兵学よりも哲学、倫理学、法学等の研究を好むやうになつたのであるから、寧ろ其方に転ずることが、却つて自分のためにもなり、又多少世間のためにもなるならんと考へて、遂に志を変じて、其好む所の研究をなさんとすることとなつたのである。」そうして見ると、西洋哲学の移入は明

加藤弘之『自叙伝』

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

治においてであると考えてよいのである。尤も、ヨーロッパにフィロソフィーという学問のあることに最初に気づいたのは、後で述べるであろう西周であろうということである。それもまだ多少推定の域を出ない。詳しくは『西周哲学著作集』の巻末の「解説」を参照せられよ。幕末においては、哲学の移入はあり得ぬことであった。さて吾々が問題にしようとするものは、哲学移入に先立って、洋学移入を排斥せんとした運動である。何よりも先ず大橋訥庵の『闢邪小言』なる著述を注意せねばならない。

（1）『加藤弘之自叙伝』二六頁。

この書は嘉永五年の発行であって、明治元年より溯ること十五年前の著述である。この書は従来、時世に暗い儒者がヨーロッパの学術の移入に対して極力反対したもので学問上の攘夷として、考えられていたものである。事実その通りなのである。この書は、ただそれだけのことでなくて、二つの興味ある問題を持っている。二つの興味とは何であるか。

近代科学としてのヨーロッパの学問は資本主義的生産の技術と本質的に不可分離のものとして発達したのである。かかる西洋の学問は、哲学よりも先ず技

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

哲学移植史（その二）

一　ドイツ哲学最初の移植

日本で最も初めにドイツ語を学んだ人は、市川斉宮と加藤弘蔵（弘之）である。その動機は、万延元年（一八六〇年）七月にドイツ（プロシア）の国使が来航して和親条約を結び、「電信機を贈物として其使用法を伝習」したことにあったのである。市川斉宮はそれまでオランダ語を修めた人である。明治五年に出版された加藤弘之訳のブリュンチエリの『国法汎論』は、ドイツ書の最初の邦語への翻訳であろうと思われる。加藤弘之は、かようにしてドイツの学問の日本への移植にその後貢献するところがあったかといえば、それほどではなかった。彼は、明治時代の哲学史中唯物論哲学においてはとにかく真先きに問題になる人であるけれども、彼はドイツ哲学へは余り関心を寄せなくなってい

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

る。むしろ、英国のスペンサーや、バジョット、シェッフレ等の学説に親しんで行ったのであった。それでドイツの学問の最初の移入に努め且つ唯物論哲学を主張した加藤弘之は、それにもかかわらずドイツ哲学の移植には関係がないのである。次に、西周は明治（移植）哲学の創始者（如何に今日のわが哲学用語が、彼に負うているかを、想うべきである）であるが、彼も英国の哲学思想の影響下にあったのである。勿論、明治十年前諸種の論文の中でドイツの哲学者や哲学説について極めて簡単な紹介的解釈をしてはいたが、決してドイツ哲学の直接の移植者という訳にはゆかない。明治十四年頃には、フェノロサが（勿論英語でもって）ドイツ哲学殊にヘーゲルを東京大学で講義していたが、これはドイツ哲学の移植のはじめと見るべきものだと思う。

しかし、広く読書人のなかにドイツ哲学を入れ込んだのは、アカデミーからでなくてむしろ哲学ジャーナリズムといってよい方面からであったことを、注意せねばならぬ。それは、竹越与三郎著『独逸哲学英華』（明治十七年）、中江篤介著『理学鉤玄』（明治十九年）、三宅雄二郎著『哲学涓滴』（明治二十二年）等の著述によるドイツ哲学の紹介及び解釈である。この三つの著述は、ドイツ哲学の移入において少からざる役目を果したものと考えられる。これらの著者

フェノロサ

哲学ジャーナリズムによるドイツ哲学移入

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

のことごとく官立大学の教授ではなく、歴史学、政治学、哲学思潮等に強い関心をもった人々であったことが、注意せられねばならない。日本のアカデミー哲学の主体を形成したドイツ哲学は、その移入をアカデミー以外の著述家達のなかで始めたのである。それは、官学の哲学専門家によってなされたよりも、一層広く読まれたに違いない。

ドイツ哲学の移入は、『独逸哲学英華』によって開かれている、ということができる。ドイツ観念論という一つの体系が、この書においては、次のように描かれている。「思フニ日耳曼（ゲルマン）ノ哲学ガ其一般文学ノ上ニ起セルガ如キ非常強大ノ波動ハ古来欧洲哲学ノ歴史ニ於テ未ダ曾テ遭遇セザル所ニシテ夫ノ批判哲学（クリチカルヒロソヒー）及ビ超絶哲学（トランスセンデンタルヒロソヒー）ノ如キハ実ニ此際ニ生セリ抑（ソモソ）モ批評哲学ハ韓図子（カント）ニ始マリテ韓図子ニ終リ遮詮的ニシテ破壊ノ性アリ超絶哲学ハ批評哲学ヨリ流出シ表詮的ニシテ整正ノ質アリ韓図子ガ古来ノ伝説ノ誤謬ヲ批判説破シテ途ヲ闢クニ乗シ観念学家タル非低子（フィヒテ）哲学進行ノ主観的ノ道ヲ求メ天地上帝説ヲ保持セル勢麗子（セーリンヒ）其客観的ノ路ヲ執リ風雲大ニ哲学界ニ起ツテ英雄頻リニ講理境ニ際会シ邪呼尾包瀑図（ジャコビハアバートシュエグレル）須意虞礼児ノ徒其ノ間ニ馳駆シ遂ニ万有霊智ノ賢歇傑児子（ヘーゲル）ニ至リ一個広延ノ方式中ニ天下各派ノ哲学ヲ包容スルノ法ヲ樹

竹越与三郎『独逸哲学英華』

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

明治時代の日本哲学（その一）

一　「哲学」以外の哲学者

明治初期は多くの啓蒙学者を輩出せしめた。その中でも、新しい優れた観点と広汎なる智識に依って明治思想史上に特筆さるべきは、福沢諭吉と西周の二人であろう。

明治初期にあって驚くべき程純粋な哲学的な労作をなしとげた西周に比して、福沢諭吉の著作はほとんど経済論、学問論、処世論等に当てられている。いわゆる形而上学的なものは見当らない。このことは、後に明らかにするように、彼の学説の本質から説明される。我々は、只その文明論、知識論及び道徳論からして彼の学説における哲学的なものを引き出さねばならない。

明治九年に現れた『文明論之概略』は恐らく当時最も影響力あったものであ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

り、彼の代表著作であるが、特にその智徳を論じた個所は彼の哲学的な見解を知るに当って最も興味深いものである。文明論とは、彼に依れば、「天下衆人の精神発達を一体に集めて其一体の発達を論ずる」ものであるが、この著作の目標は、日本の国家の独立を確立せんがためには文明に進まねばならぬということを明らかにするにある。文明は一国の人民の智徳の現象であるが、諭吉は、人間をして文明に進ましめるものは徳ではなく智であると強調して、在来の儒教倫理の思想を排撃している。この点は興味深い。諭吉に依れば、或る一の倫理的観念は人間の天性に先天的に付与されているものではなく、人間の或る一定の関係の上に発生するものである。

「故に云く物ありて然る後に倫あるなり倫ありて然る後に物を生ずるに非ず、臆断を以て先づ物の倫を説き其倫に由て物理を害する勿れ。[1]」

（1）『文明論之概略』（岩波文庫版）五二頁。

であるから、例えば「君臣の義」は君と臣という一定の客観的な関係があって始めて形成されるものである。ここには、勿論、倫理が人間の社会的諸関係の上に発生し経済的、政治的構造を反映して階級的性格を帯びるというような

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

明確な規定はないにしても、右の如き「物ありてしかる後に倫あるなり」という考えは、固陋なる儒教倫理思想と対立して新しき観点に立ち、その中には唯物論的なものが含まれていると考えられる。

諭吉がその智徳の弁において智が徳を支配することを説いたのはその根柢に大きな意味を持っている。一定の時代に適応した具体的な知識、思想こそその存在の意義を持つのであって、それから遊離した抽象的な道徳観念は何ら人類の進展に役立たざるのみか、反って有害なものである、と彼は説く。徳は只個人に関する問題であって、人間の具体的生活には結び付かない。孔孟の学説を排撃した個所で彼は次の様に言っている。

「元来孔孟の本説は修心倫常の道なり畢竟無形の仁義道徳を論ずるものにして之を心の学と云ふも可なり道徳も純精無雑なれば之を軽んず可らず一身の私に於ては其功能極て大なりと雖も徳は一人の内に存して有形の外物に接するの働あるものに非ず故に無為渾沌にして人事少なき世に在ては人民を維持するに便利なれども人文の開かるに従て次第に其力を失はざるを得ず然るに今内に存する無形のものを以て外に顕はるゝ有形の政に施し古の道を以て今世の人事を処し情実を以て下民を御せんとするは惑溺の甚しきものと云ふ可し……周の時

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com